

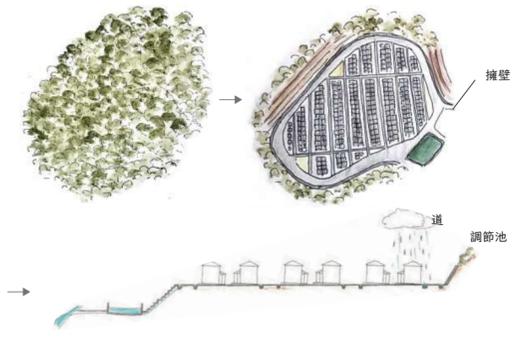


いきものうつわ

- グレーの街から共生へ、育んでつくる未来 -

土から離れてしまった暮らし

郊外にある分譲住宅地は、もともと山や林だったところを切り開き、つくられた。しかし、そこは、道路や擁壁、建物が土にフタをし、住民が大地とふれあう生活ではなくなった。「グレーの街」である。
また、このような自然を制御する街は、「人が年をとること」「植物は遷移していくこと」など、自然の営みから断ち切られてつくられているため、時の流れに対応できない。人から使われなくなると捨てられてしまう。



敷地： 岐阜県 多治見市にあるニュータウン

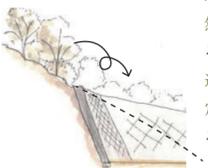


多治見市は、名古屋方面への利便性によって、1980年～2000年代にかけて、市内各地で新興住宅地の開発がおこなわれたため、名古屋のベッドタウンとして知られている。対象地である松坂町の住宅地は、1990年代に建てられた。当時、家を建てた世代は5、60代となり、少しずつ高齢化が進んでいる。
敷地近くには、小学校や駅があり、次の世代の子どもたちにとって良好な郊外住宅地として、この街が、多様な生き物の住まう「生きた場所」となる未来を考える必要がある。

敷地の特徴



この敷地の周囲は擁壁に囲まれている



地形の安定のために、本来の自然地形に戻そうとする作用がある。それに対し、力学的に抑え込むのではなく、自然が自ら安定していくようにする必要がある。

現在、道路や擁壁はコンクリートなど、大きな力と重力で固めることがあたりまえとなっているが、それらは、土の中の水と空気の流れが停滞し、環境としては安定しない。近年、豪雨の際このような場所では、道路や擁壁の崩壊がみられる。しかし、石積の段畑など、機械力をもたなかった時代の土木は、その土地の風土と一体化し、残り続ける。

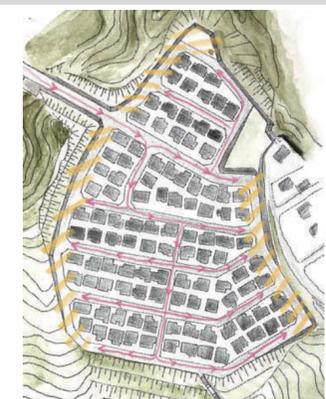


提案・目的

人は土から離れては生きていけない。自然を「制御」ではなく、受け入れ、育てていく関係をつくることで、この街に愛着を生むと考える。街のコンクリート（ガラ）を集め、少しずつ、街の周囲を擁壁から段々畑にしていく。そうすることで、「水と空気が浸透し、生物と共に暮らす循環がうまれる街」を目指す。



「車の道」と「住民の道」



街の道路の真ん中を残し、周囲を段畑にしていく。段畑は人が歩いてとおるため、車の道は中央に、山側に人と動物の道ができる。

植生の特徴

宅地開発をしたからこそ生まれた植物たちの動きがある

①周囲からおりてくる	②人工物をのぼっていく	③ふまれるから生える	④陰に生える	⑤花壇から脱走する
山 ヤマハシノキ アケボノソウ クマノソウ クマノソウ クマノソウ	クマノソウ	エノキ?		マリーゴールド

まちな日常 周りを歩き、落ち葉をひろう



周囲が道路で、コンクリートやアスファルトで覆われているため、その周りに落ちてくる落ち葉や枝、実などは、住民の掃除当番によって、集められ、捨てている。



1 きっかけ

先人たちの土のある暮らし

ものがたりの始まりは、ある日、街のグレーを変えるきっかけとなる先人たちが引っ越してくるところからはじまります。この先人たちは、アスファルトやコンクリートで塞がれた宅地を土に変え、自然と共に暮らす喜びを街にシェアすることで、その生活に共感を生んでいく役割を担っています。

登場人物：住民にきっかけをもたらす「先人」たちの役割

この計画はひとりではできない。「街の住民が共感し、アスファルトやコンクリートで塞がれた自然との境界を土に戻していく活動のきっかけ」が必要となる。そこで、生物との暮らしの先ゆく者として、3軒の住民にその役割をになってもらう。

苗床さん夫婦

街の苗床として、たくさんの植物を育て、そこで採れたハーブなどを近所の人にふるまう。

子どもたちが巣立ち、終の棲家をもとめやってきた60代夫婦

ニワトリ一家

ニワトリを飼えるかわりに、そこで生まれた卵を使った食堂をひらく。また、その排水を使い空き地に池をつくる。

子どもがいる家族

ヒツジ飼いおじさん

ヒツジを飼い、ヒツジ小屋で堆肥づくりをする。

ひとり暮らしのおじさん

自然と共に暮らす喜びを街へシェアすることで、共感を生んでいく。

既存住宅の操作と暮らし方

苗床さん夫婦

2人暮らしでは場所を余すので、家の半部分を温室にし、植物園として街へひらく。夏から秋は間仕切りを開け、一体として使い、温室では風で揺れる植物たちの中ハーブティーを近所の人にふるまう。冬は、窓を閉じ熱をためることで、冬でも暖かい。植物と暮らす楽しさを伝え、帰りに苗を持って帰ってもらうことで、街中に苗が増えていく。

土と植物、動物を生かした食の暮らし

空き家を2つ使って暮らす。1Fは街へ開放し、通りすがりの人がニワトリを見にきたり、生んでくれる卵をその場で調理し、ふるまうことができる。このキッチンからでた排水は、花木土をとおり、バイオフィルターを通して空き地に池をつくっている。ここで採れた空心菜もまた食堂でふるまわれる。ここを訪れた街の人はニワトリとの暮らしや、水を土に還すこと楽しさを感じる。空き地の池は、ここで飼われているニワトリの水飲み場でもあり、多様な生き物が集まる子どもたちの遊び場子育て世帯の家族4人となる。

土づくりの暮らし

擁壁側にあるおじさんの家の近くには、山からたっくさんの落ち葉がふってくる。1人暮らしで住まいを小さくするとき、1Fをたい肥小屋兼ヒツジ小屋にする。山の上から降りてくる落ち葉やヒツジのフンなどで土づくりをし、その土があることで、段畑や空き地に畑ができる。通りすがりの落ち葉掃除担当番の住民たちに、「山の上から降りてくる植生を抑え込むのではなく活用しよう」と気づきをあたえる暮らし。

ヒツジかいのおじさん

3軒からはじまる共生の関係図



気づき 地面と土の境界

ニワトリの好きな一年草は街のコンクリートの間から生えている。ニワトリたちと暮らせば、地面をコンクリートやアスファルトにしないほうが楽しい風景だ

気づき 山と街の境界

上からおりてくる植生、抑え込むのではなく活用しよう。山の栄養を土づくりに使い、その土で育てた草はウマイ!

気づき 水と土の境界

水は土に還すときれいになる。それを私たちは飲める、食べれる。水辺にはいろんな生物がきて、子どもたちにとっても楽しい遊び場がうまれる。

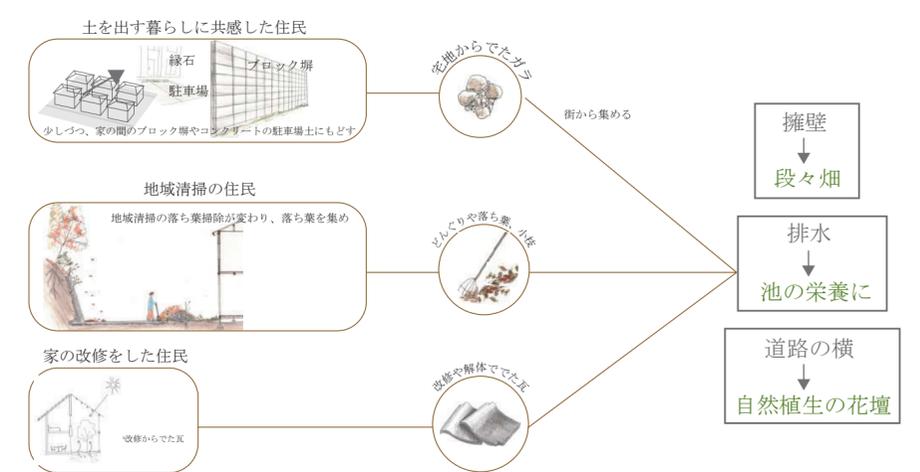
生物や大地の恵みの
おすそわけ



2 まちの変化

土をだすくらしが個人から街全体へ展開され、擁壁だったところや、宅地のアスファルト、コンクリートが住民の手で育てられたものになっていく。

あつまった、ガラや、落ち葉や瓦などで、土との境界を組みなおしていく



先人たちの土の暮らしに共感した住民たちが、少しずつ、家と家の間のブロック塀やコンクリートの駐車場を土に戻し、街からガラが集めます。地域の共同清掃は、山から降りてきた落ち葉や土を、ガラ山に集めることで、捨てずに活用するようになり、その、街から集まったものを活用し、土との境界である擁壁や排水溝、道路横の側溝などを徐々に浸透性のあるものへと組みなおしていく。

擁壁が段々畑に

子どもたちが遊んで、育てる

子どもたちが踏んで、敷かれた落ち葉などが土やガラに馴染み、絡んでゆくどんぐりや落ち葉、小枝

近所の人が集めた葉っぱや枝

街の住民が積んだガラ

自然と上から落ちてきたもの

おじさんが集めた葉っぱや枝や家

おじさんが積んだガラ

おじさんがガラを積むことから始まり、住民の集めた葉っぱやガラの積み重ねで、層ができていく。

土に生かした野菜

擁壁は、住民が集めた葉っぱやガラの積み重ねで層をつくっていき、そこを子どもたちが踏んで遊ぶことで、敷かれた落ち葉やガラや土が馴染み、安定した段々畑を街共同で育てていく

各家の雨水や排水がビオトープの栄養になる

排水の流れ

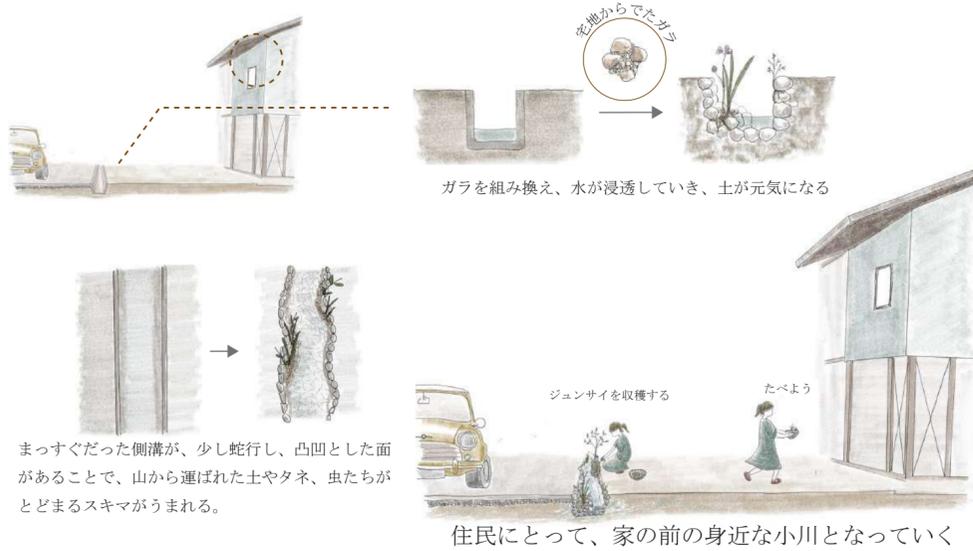


雨水の流れ

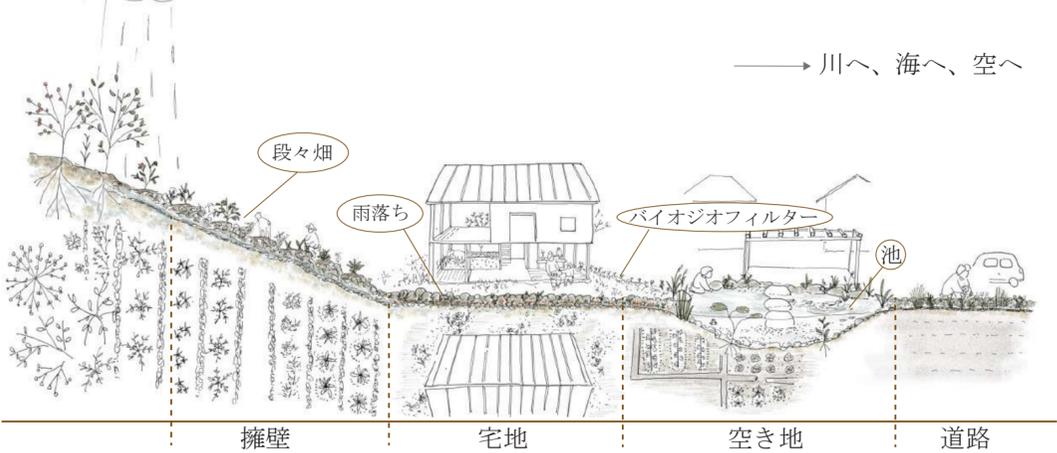


街からコンクリートが減り、家と家の境界や山と街、地面と土の境界は揺らいでいくと、各家の雨水や排水の利用の仕方が変わっていく。街中の瓦や落ち葉、枝を敷き詰めた植栽帯が、家をぐるっとまわることで、雨が土に還り、その水の路をみんなが、すこしづつ空き地に伸ばしていくと、池ができる。できた池や水の路は、子どもたちの遊び場であり、そこに住む生物が、水を綺麗にしてくれる。

道の横が自然植生の花壇になる



水の道がつながっていく



すると、山から宅地、川へと水の道がつながっていく。山からの植生が、下へ下へ降りていき、下流に行けば行くほど湿地となっていく、水生のいきものが増えていく、植生のグラデーションができていく。

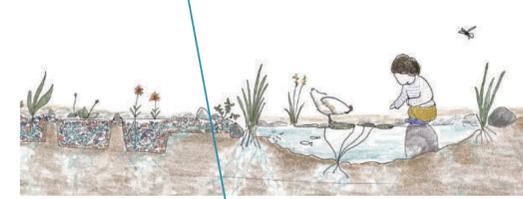
気づき 山と街の境界

上からおりてくる植生、抑え込むのではなく活用しよう。山の栄養を土づくりに使い、その土で育てた草はウマイ！



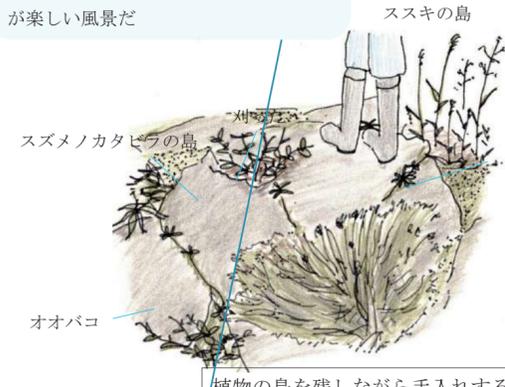
気づき 水と土の境界

水は土に還すときれいになる。それを私たちは飲める、食べれる。水辺にはいろんな生物がきて、子どもたちにとっても楽しい遊び場がうまれる。

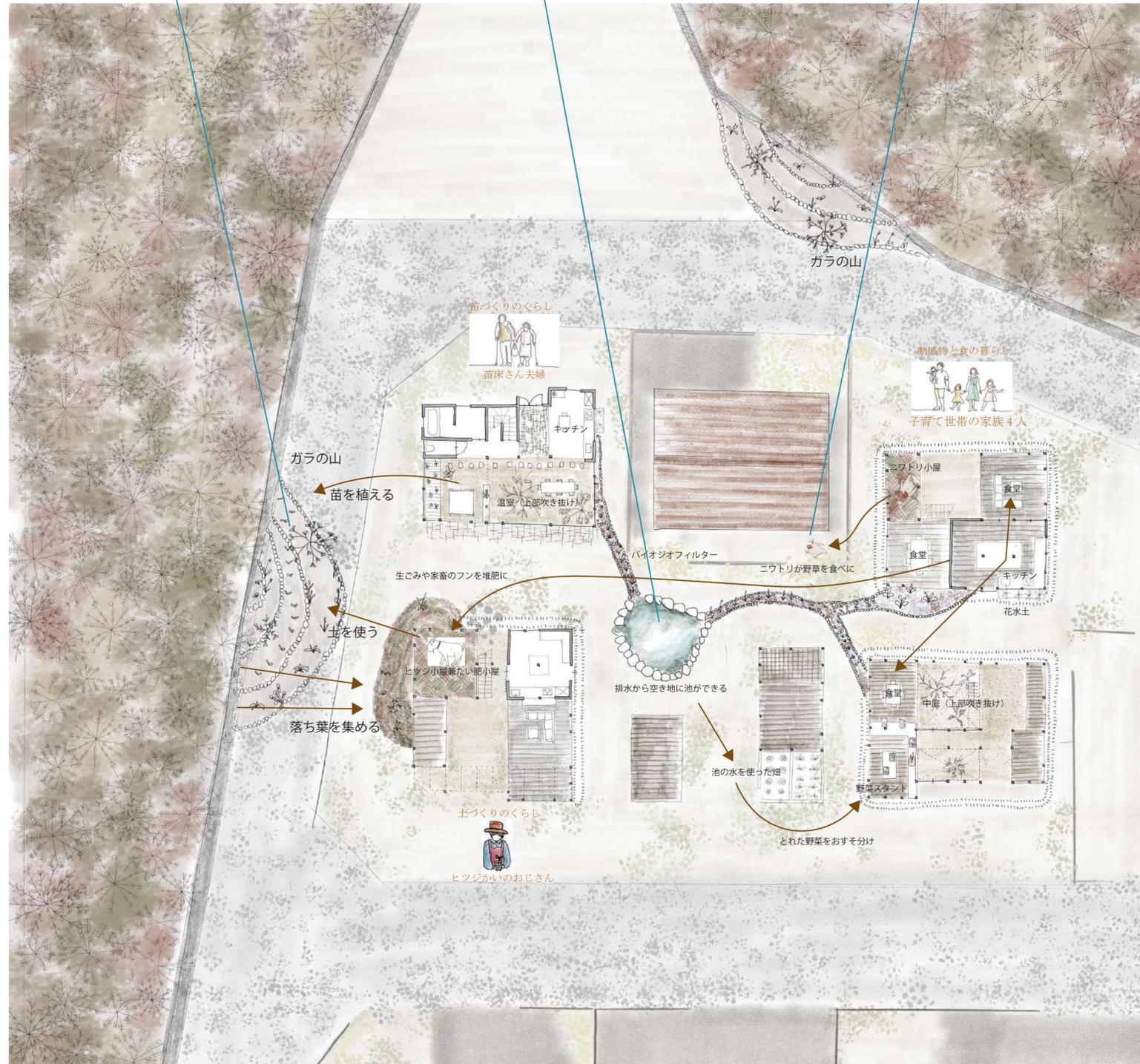


気づき 地面と土の境界

ニワトリの好きな一年草は街のコンクリートの間から生えている。ニワトリたちと暮らせば、地面をコンクリートやアスファルトにしないほうが楽しい風景だ



植物の島を残しながら手入れする





3 山と街の境界を楽しむ

先人たちがガラや落ち葉を集めることから始まり、街のみんなで少しずつ積み上げた山から街への連続が山の植生を呼びこみ、日々、タネや葉っぱが積もっていく。その山の栄養を生き、愉しむ暮らしが展開されていく。

山の暮らしをあじわう小屋



畑を登った先には、ちょっとした山のくらしを味わえる小屋があり、山で拾った木の实を調理し、みんなでたべたり、草木染を愉しんだり、薪をつくるために木を切って、山を守っていく暮らしが変わっていく。

小屋のつくりかた

段畑と同じでみんなで育てる小屋であり、段畑をつくって過程で出るものを使ってつくる。そうすることで、宅地からもってきたものと山のものごちゃまぜになった新しいけれど馴染みのある小屋となる。

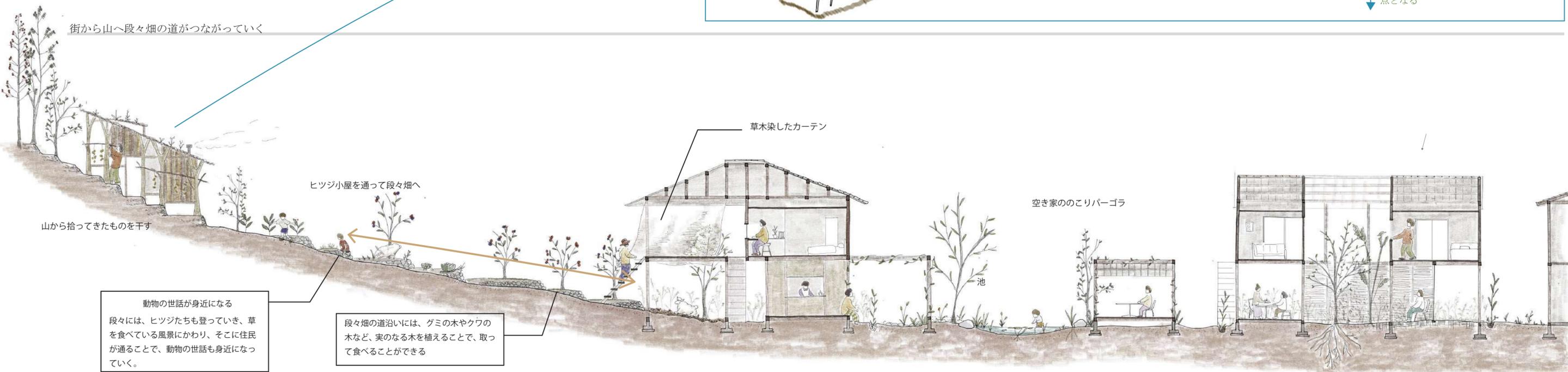


屋根の上で鳥たちがついでついでになり、観察小屋では、山の植物や動物を同じ目線で愉しむことができる。

土と水を含んだ屋根によって、夏はその気化熱で、涼しい

山の土やタネを含んだ水が、街につながっていき、山の植生を宅地へ運ぶ出発点となる

街から山へ段々畑の道が繋がっていく



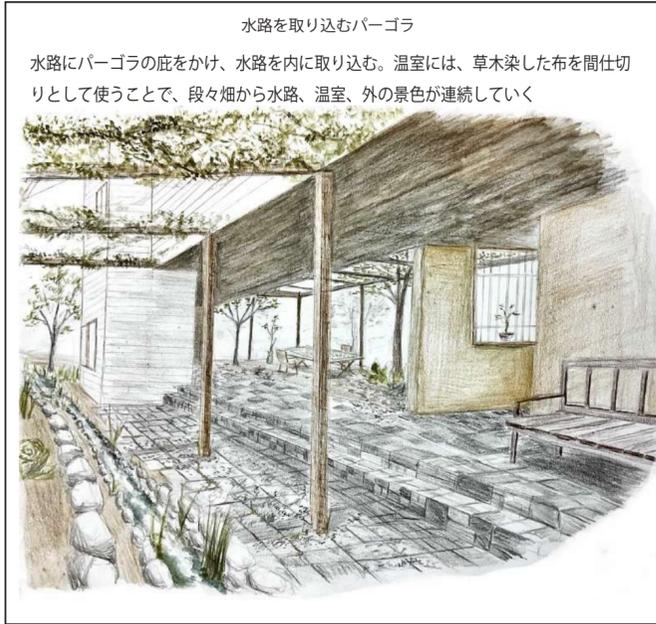
動物の世話が身近になる
段々には、ヒツジたちも登っていき、草を食べている風景に変わり、そこに住民が通ることで、動物の世話も身近になっていく。

段々畑の道沿いには、グミの木やクワの木など、実のなる木を植えることで、取って食べることができる

ヒツジ小屋を通して段々畑へ

山から拾ってきたものを干す

家の変化 山が身近になったことで、そこで出会った草木、土を使い、自然と対話する場所が付加されていく

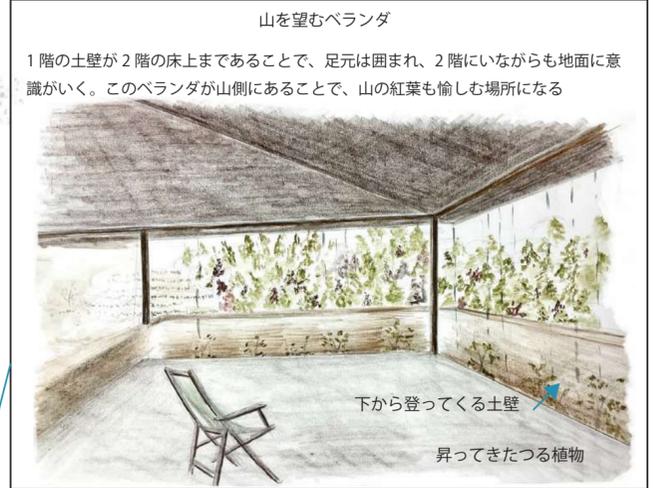


水路を取り込むパーゴラ

水路にパーゴラの底を掛け、水路を内に取り込む。温室には、草木染した布を間仕切りとして使うことで、段々畑から水路、温室、外の景色が連続していく



山から降りてきた植生を取り込んだ中庭



山を望むベランダ

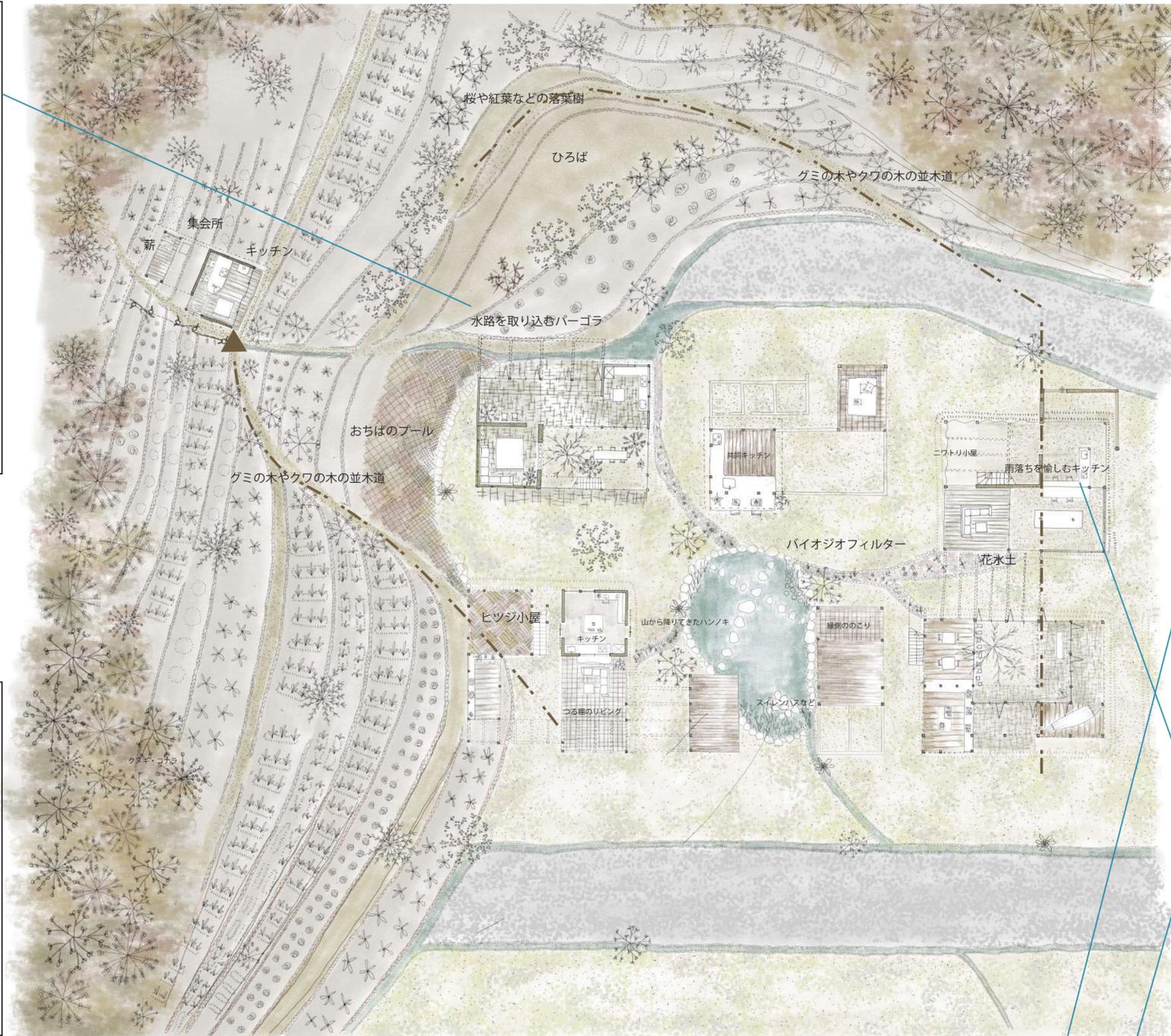
1階の土壁が2階の床の上まであることで、足元は囲まれ、2階にいながらも地面に意識がいく。このベランダが山側にあることで、山の紅葉も楽しむ場所になる

下から登ってくる土壁
昇ってきたつる植物

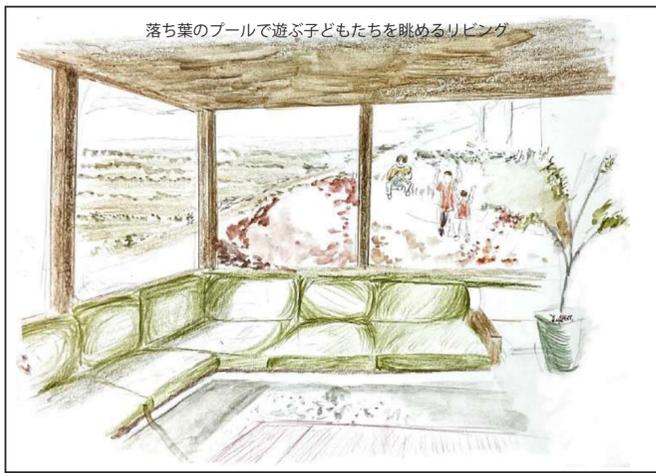


雨落ちを愉しむキッチン

雨落ち溝をとりこむように土壁を家の中から伸ばしていく。視界は制限され、上から降ってくる雨が植栽に滴っていくを感じる。キッチンがあることで、そこに生えた水草をとって調理できる。



自然にできた落ち葉のプール
段々がすり鉢状のところは落ち葉が集まってくところであり、子どもたちの遊び場や、そのまま落ち葉を堆肥づくりのために貯める場所にもなる



落ち葉のプールで遊ぶ子どもたちを眺めるリビング

